

一 次の各問に答えなさい。

問一 次の――部のカタカナを漢字にしなさい。

- 1 アンガイ難しい問題だ。
- 2 大きなセイカを上げる。
- 3 ユウイギな毎日を送る。

問二 次の――部の漢字をひらがなにしなさい。

- 1 言語道断なふるまいだ。
- 2 快く引き受けた。
- 3 母は美容院を営む。

問三 次の矢印は何画目ですか、それぞれ漢数字で答えなさい。

1 飛

2 必

3 世

4 州

問四 次の――部のカタカナはどの漢字で書くのが適切ですか、最も適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

1	ア	ア	ウ	暑
2	ア	変	ウ	代
3	ア	治	ウ	修
4	ア	勤	ウ	務
5	ア	裁	ウ	断

問五

次の慣用句の空欄に共通して入る漢字一字を答えなさい。ただし、全て身体の一部を表す漢字が入るものとします。

5	4	3	2	1
をのばす	が痛い	がかたい	が高い	がない
を洗う	にはさむ	がすべる	につく	に余る
が出る	をそろえる	に合う	であしらう	を疑う

二

聞き取りの問題です。先生の指示に従って答えなさい。

三 次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

文字で組立てられた文章は、**A** ことによって、ひとつのまとまったイメージとなり、内容が思い浮べることができます。過去に体験した記憶と結びつくと、音やにおいまで感じることができ
ます。同じ文章を読んでも、誰もが同じイメージを持つとは限りません。イ

このあたりが、絵や映像に比べ、読むという作業の楽しさであり、難しさなのです。水泳、ダ
ンス、山登りなどのように、**B** に楽しむものは、どれも楽しさがわからなければ、疲れ
めんどろになります。本を読むということは、これと同じように、受け身ではなく、**B** なの
です。

それでは、試しに、次の文章を読んでみて下さい。めんどろがらずに、情景を思い浮べてみま
しょう。

国内を旅行するときは、海の近くでも山の中でも、日本の朝食をちゃんと用意してくれ
る旅館を利用しています。たきたての白いご飯とあたたかい味噌汁を前にすると、ここへ来
てよかったなど、しみじみ感じます。

たった三行ですが、ここからいろいろな情報を得ることが出来ます。

「国内を旅行するときは」と、言っているのは、海外へもでかける旅行好きな人のようです。そ
して、その国、その国の朝食を楽しんでいるようです。そんな人になったつもりで、日本旅館の
朝食のおぜんに向かってみましょう。細かいことは書かれていませんが、茶碗にはふくらたきた
てのご飯が、そして木のお椀には、湯気の立つ味噌汁が入っています。毎朝、和食の朝ごはんとい
う人の頭に浮んだ食卓には、ほかにいろいろなものが並んでいませんでしたか。つけものやた
まご焼き、調味料の入ったびんなど……。うちの朝食は、バタートーストとハムサラダと紅茶とい
う人も、和食の知識はあるので、ご飯、味噌汁を中心とした朝ごはんのイメージは作れるはず
です。（中略）

文章を書いた人が、もし、味、色、器、量までイメージを伝えたいなら、細かく書き込まなけ
ればなりません。本ではさし絵も大いに助けになります。もしそれほど詳しく描いていないのな
ら、読者は自分の体験や知識をもとにして、自由にイメージをふくらませればいいのです。大ま
かな人は大まかでけっこう。細部にこだわる人は自分なりに補って読みます。口

さて、みなさんは、どんな読み方をしましたか。書いてある文字だけ目で追って、フツンフツン
と切れ切れに読んだのでは、あまり楽しくないと思います。書いた人になったつもりで、ひと息に
読んで下さい。この人は、どの地方へ行っても、その土地らしさの味わたる旅館に泊まるよう

す。朝食にはそれが表われるので、しみじみ旅をしている気分になれるというわけです。海産物が手に入りやすい所なら、ワカメの味噌汁やアジのひものが出るかもしれません。山のものなら、きのこや野菜が中心の献立でしょう。

このように、書いた人といっしょに状況を体験していくと、スムーズに読みすすむことができます。簡単な文章でしたが、少し複雑になったり、長くなったりしても同じことです。ストーリーのある物語や小説だけではありません。ほかのどんなジャンルの本でも、読んだことを頭の中で組み立てて、全体を理解し、つぎつぎに読みすすんでいくという点では同じです。少しくらいわからないことがあっても、そこでひっかかっていないで、先へ読んでいく、ということなのです。前後の関係で少しあとからわかったり、想像力で補うこともできます。ずっと後になって、あれはそういうことだったのか、とわかる日が来ることもあるのです。ハ

本を読む技術についてふれてきましたが、本を読むのがめんどろうだという人には、技術のほかに、もう一つ大切なことがあります。

それは、自分にあった本を選ぶということです。

知らないことばかり出てくる本では、いちいち人に聞いたり、読みとばしてばかりいるので、おもしろくありません。辞書をひきながら読むのでは、外国語の勉強をしている気分です。これでは、ことばの意味を理解することに追われて、内容がわかったとは言えません。

そこで、本を選ぶときのポイントの第一は、出版社が目安として表示している読者の対象年齢にそれほど違わなくていいということです。「中・高校生向き」より「小・中学生向き」が合っていることもあります。パラッと開いて、読みやすいかどうか、自分の直感を信じて下さい。

夏休みに中学生が何人も来て、感想文用に本を探してほしいと頼まれることがあります。そんなときは、まず、一冊ずつそれぞれの人に適当な本を探します。

「字の大きさは、このくらいいい？」とたずねると、「もっと大きい」とか、「これくらいいい」など、いろいろな返事が返ってきます。好みや内容の話は、その次です。まずは、漢字の分量と字の大きさ、行間、さし絵があるか。これで読みやすいかどうかが決まります。ときには、「小学中学年以上」と書かれている本をすすめることもあります。「〇〇以上」というのは、上はおとなまで楽しめるということなので、全然おかしくありません。おとなが読んではからしいと思うような本なら、子どもや中学生が読んでおもしろいはずがないのですから。

本を選ぶ二つめのポイントは、自分に近い語り手や主人公の話をみつけることです。自分に近いというのは、年齢に限ったことではありません。家族との関係や興味をもっていること、性格など、なにかしら共通点がありそうな人の話だと、その世界に入っていくのに無理がありません。

作者は、読者が主人公といっしょにいろいろなできごとを体験できるように、工夫して物語を創作します。物語を読む経験を積み重ねた人は、年齢、性別、立場、性格が自分とかけ離れ

た登場人物であっても、一体となることができます。また、主人公以外の登場人物の中に、共感できる人を発見して親しみを感じることもあります。

本なんてめんどろうだな、と思っているうちは、まず物語の世界にスムーズに入っていくかが肝心です。それには、複雑な人間関係や心理描写に重点を置いたものより、今の自分になりきれそうな主人公と、一体となって活躍できる物語を探してみましよう。本のカバーに、短くあらすじが書かれていたり、人物の紹介が書かれていることもあります。目次や前書きも参考になります。パラパラながめるより、はじめの部分を少し読んでみることをすすめます。時代や土地、主人公について、読者に説明をしながら、物語が始まっていくからです。出だしを読んでも、ちょっとおもしろそうかな、と思えたら本選びは成功だったということです。

なかには、物語や小説に興味がないという人もいます。それなら、文学以外の本に目を向けてみて下さい。

本選びの三つめのポイントは、どんなジャンルのものでも、今、興味のあることが書かれている本をみつけるということです。伝記、歴史、地理、機械、科学、音楽、そのほかにも本のジャンルはたくさんあります。その中から、好きな勉強や遊びに役立つ本、楽しめそうな本を探してみましよう。

たしかに、出版されるものの中で、一つのジャンルとしては、文学は圧倒的に多いのです。このため、本が好きなことと、文学が好きなのは同じようにとらえられがちですが、そうではありません。二

作者の内にあるもの、考え、思い、情熱は、本を **C** として、読者に伝えられます。物語を楽しむ習慣がなくても、それ以外の本が楽しめるなら、それも本との出会いと言えます。本を読むのはめんどろうだと思っている人も、なんだ、それなら読んでもいいよ、と思いはじめてくれればうれしいのですが。

D、本を読むのに、高度な国語力は必要ありません。ただし、楽しく読めないとなかなか読む気になれないし、めんどろうなものなのです。

楽しく読むには、ちょっとした技術が必要です。頭にイメージを浮かべながら、読みすすんでいく方法についてお話ししましたが、これは、ほとんど習慣のようなものです。自分に合った本を選んで、たくさん読むうちに身につけてきます。ごく小さいときに身につけてしまった人は、苦勞しなくてもいいので、得です。そうでないとしても、これからの長い人生を考えれば、今から読み始めても、遅いといことはまったくありません。

E、じゃあ、ちょっと本を読んでみようかなと思ったら、三つのポイントを頭において、本を選んで下さい。難しいものではなく楽しんでどんどん読めちゃうもの、主人公やテーマが身近かに感じられるもの、興味がもてるジャンルのもの。

実際にどの本がこれにあてはまるかは、人によって違います。だから図書館にはたくさん本があるのです。その中に、みなさんにぴったりの本がないはありません。探すのに時間がかかりそうなら、ぜひ図書館員に手伝ってもらいましょう。

(田中共子 『図書館へ行こう』による)

問一 次の一文が当てはまる場所を、本文中のイ、ロ、ハ、ニの中から選び、記号で答えなさい。

読む人の知識、経験、習慣、文章を理解する力、想像力の幅などの違いによって、少しずつ違ってくるからです。

問二 ☐ A に当てはまる語を、本文中から二字でぬき出さない。

問三 ☐ B に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 受動的 2 能動的 3 一時的 4 一方的

問四 — 部1「ここからいろいろな情報を得ることができます」とありますが、得られる「情報」として当てはまらないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 国内に限らず、海外を旅行するのも好きな人のようだ。
2 たきたてのご飯と湯気の立つ味噌汁が食卓に並べられている。
3 ご飯や味噌汁以外にも様々なおかずが想像できる。
4 普段なかなか旅行に行けない立場の人が久々に旅行をした。

問五 — 部2「読みやすいかどうか」とありますが、それはどのような条件で決まりますか、文中の言葉を使って答えなさい。

問六 — 部3「一体となることができず」とありますが、「一体となる」とはどういうことですか、本文中から三十字以内でぬき出さない。(句読点はふくまない)

問七 ☐ C に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 仲立ち 2 中心 3 題材 4 資料

問八 ☐ D・☐ E のそれぞれの語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 D つまり E しかしながら
2 D けれども E そこで
3 D このように E そして
4 D すると E それでは

問九 — 部4「三つのポイント」とは何ですか、本文中からそれぞれ二十一字、十九字、二十二字でぬき出さない。

問十 — 部①「イメージ」、②「テーマ」、③「ジャンル」をそれぞれ漢字二字で表しなさい。

四 次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

急坂に挑んだのは、結局一度だけだった。

坂を下った勢いで交差点を渡り、そのまま走っていったのだ。二人とも、宇宙戦艦ヤマトのテーマを歌い終わるまではペダルをこぎ続けたのである。

勢いがついたせいでペダルも軽かった。二台の自転車はどこまでも走り続け、坂の下の商店街を抜けて五階建ての棟が連なる団地の敷地に入っていた。

敷地の中の道は桜並木になっていた。新緑の葉が茂る通りには自動車の影もなく、軽快なスピードで走り続けられる。途中で道を曲がっても桜並木は続いていて、建ち並ぶ棟々の間を走り回るのも楽しかった。

敷地の端まで来ると、フェンスの向こうに麦畑が広がっているのが見えた。団地の桜並木はそのまま農道に繋がっていて、敷地の外に走っていくことができる。

歌はとくに歌い終わっていたが、昇平も草太もそのまま走り続けた。急坂の興奮と歌の余韻が体に残っていて、ちっとも止まる気がしなかった。

道の舗装が途切れると、農道の土や草の感触がタイヤ越しに伝わってくる。時折小石を踏んでハンドルが揺れるのさえ楽しかった。

昇平は夢中になって走り続けた。ブレーキをかけたのは、後ろから草太に声をかけられた時だ。

「シヨちゃん！」

草太の声はやけに真剣だった。自転車を止めて振り向いた昇平に、ぎこちない笑顔で尋ねてくる。

「帰り道、分かる？」

急に不安になってきたらしかった。――昇平も、辺りを見回しているうちにその気持ちがあった。

いつの間にか、周りの景色は全く知らないものに変わっている。風ヶ丘も見えないし、何故かさつき下りてきたばかりの特訓山の影も見えなかった。

「帰り道なんか……来た道を戻りゃあいだけだろ」

強がってみせたが、不安はだんだん膨らんできていた。今来た道の両側には麦畑が広がっているだけで、人影さえも見えない。

空は夕暮れの茜色に染まりかけている。早く帰らないと夜になると思ったら、腹のあたりが締めつけられるような心細さを感じた。

不意に強い風が吹いた。青々とした麦の穂が揺れ、畑そのものが波打つように動く。――その光景を見ていたら、見知らぬ世界に迷い込んでしまったような錯覚がこみ上げてきた。

怖いと思った。その途端、両脚が疲れ切っているのに気づいた。

脚全体がだるくて、膝のあたりがぼんやりと熱をもったように疼く。ついさっきまで快調にペダルを踏んでいたのに、今となっては動かすのも億劫なくらい重たかった。

「もう、帰ろうか」

唾を飲み込んで言った。草太も無言で頷く。

自転車の向きを変え、団地の方に向かって走り出した。――急いで帰らなくちゃと思っていたが、ペダルが重くてスピードはなかなか上がらなかった。

道に迷ったと気づいたのは、団地の敷地に足を踏み入れた時だった。

どっちに行っているのか分からないのだ。さっき敷地の中をぐるぐると走り回ったせいで、すっかり方向を見失っていた。

来た道を戻ろうと思っても、白いコンクリートの建物はみんな同じに見える。何棟も並んだ敷地の中では、どの道を進めばいいのか見当もつかなかった。

街灯のともり始めた団地の中で、昇平は草太と顔を見合わせた。

「特訓山って、どっちな？」

「……………」

昇平は特訓山の高台を目指せばいいはずだった。そうすれば来た道の方に戻れるはずなのに、特訓山は高い建物の陰に隠れてどこにあるのかわからない。

「…………どうしようか」

「誰かに聞いてみようよ」

「だって、何て聞けばいいんだよ？」

特訓山という名前は、昇平が勝手に名付けたのだ。他人に言っても通じるわけがない。

「……特訓山の本当の名前が分かんないや、そこまでの道だって聞けないだろ」

「じゃ、商店街はどっちですかって聞こうよ」

「商店街？」

「さっき坂を下りた時、団地に入る前に通っただろ？」

「ああ……そっか」

その手があったかと思った。少し離れたところで立ち話をしているおばさん達がいたので、そっちに向かって進みかけた。

しかし昇平はすぐに立ち止まった。いざ道を尋ねてみようとしたら、急に気後れを覚えたのだ。

見ず知らずの人に声をかけることが、ひどく難しいことに思えた。恥ずかしいような恐いような気がしておばさん達に近づくことができない。少し迷った末、昇平は草太を振り返った。

「……やっぱり、やめとこうぜ」

「どうして？」

「だってさ、俺達校区外に出てるんだぜ。道なんか聞いて、君達どこの子って聞かれたらどうすんだよ」

「そんな時は……この近所に住んでますって言えばいいじゃん」

「近所に住んでる奴だったら、どうして商店街の場所なんか聞くんだよ」

「あ、そっか」
 「な？ だからやっぱり、俺達だけで帰り道を探すしかないって」
 そう言っぺ、ダルをこぎはじめた。どっちに進むべきかは分からないが、とにかく前に進むしかない。(中略)

特訓山の麓^{ふもと}まで着いた時、草太はすぐに信号を渡って登り始めようとした。しかし昇平は、不意に自分がその坂を登りたくなっていることに気づいた。

「ソータ、ちょっと待った」

自転車^{自転車}を止めて振り返る草太に、昇平は右に曲がる道を指してみせた。

「坂登らないで、こっちから帰ろうぜ」

「どうして？」

草太はAを丸くした。来た道に戻るのではなく、わざわざ知らない道を通って帰るというのが信じられないらしい。

昇平自身にもよく分からなかった。ただ思いついただけなのだが、草太を説得するためにはなんとか理屈^{りくつ}をつけなければならなかった。

「だってさ、絶対こっちが近道だぜ」

信号が変わり、止まっていた車が動き出した。昇平の指さした方向に車の流れが向かっていく。

その流れを見て気がついた。——その道の交通量は、昇平にも草太にも見覚えのあるものだった。

「この道って多分……県道だろ？」

昇平が言うと、草太は左右に視線を走らせた。道路に描かれた横断歩道やセンターラインを見ているうちに、その横顔に納得したような表情が浮かんでくる。

「……そう言われれば、そうかな」

その反応に自信を深め、昇平はさらにたまたみかけた。

「きつとこの道、特訓山をぐるっと回ってソータんちまで続いてんだよ。わざわざ坂を登ってくり、この道を走ってった方が間違いないって」

「……そうかな？」

通ったことのない道を走るのに抵抗があるのか、草太はまだ迷っているようだった。昇平がこそことばかりに声を強めた。

「坂を登ったってさ、神社から坂に出るまではぐるぐる曲がっただろ。ソータ、あの時に走った道なんて覚えてるか？」

「……………」

草太は黙って首を振った。昇平はさらに声を強める。

「な？ 坂を登ってっただって、上で道に迷っちゃったら大変だぞ。今度は神社を通らせてもらえないかもしれないし、下の道で行った方がいいって」

そんな説得に応じ、草太も右に曲がることに同意した。まだ不安そうではあったものの、昇平の後に続いてその道を走り始めたのである。

少し進むと道がカーブしており、その曲がり口には一本の道路標識が立っていた。青い六角形に二桁の数字——草太の家の脇にもある、県道を示す標識である。

「ほら、県道だ！」

昇平が勝ち誇ったように言うと、草太も急に元気になってきた。歓声を上げて昇平を追い越し、先に立って走り始めたのである。

昇平もすぐに追いつき、しばらく競争するように走っていった。やがて道の左側が林に変わり、それが途切れると前の景色が開けた。

「風ヶ丘だ！」

二人揃って声を上げた。——藍色に暮れかかった空の下、見慣れた丸い稜線が見えたのだ。

途端に、さっきまでの不安も吹き飛んだ。疲れ切っていた脚にも力が戻ってきたような気がした。

赤信号に止まって周囲を見回せば、行きで脇道に入った十字路である。あとはこの道をまっすぐ進み、中根橋で浅川を渡れば風ヶ丘まで帰れるはずだった。

「ほらな、近道だったろ」

昇平が言うと、草太も笑って頷いた。再び走り出した後、橋を渡る時には後ろを振り返って声を上げたほどである。

「冒険、面白かったね！」

昇平も後ろを振り向いた。——太陽は既に特訓山の向こうに姿を隠し、西の空は夕焼け色に染まっている。

その光景を見ているうちに、自然と言葉が口をついていた。

「また来ような」

「うん」

草太も強く頷いてくれた。二人で顔を見合せて笑い合った。

「だけど、他の奴には内緒だからな」

「分かってるって」

*注 「億劫」……めんどくさくて気がすまないこと。

問一 ――部1「草太の声はやけに真剣だった」とあるが、なぜ「真剣」だったのですか、その理由を文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問二 ――部2「その途端、両脚が疲れ切っているのに気づいた」とありますが、それはなぜですか、その理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 坂道を下りることができてうれしかったが、見知らぬ土地で慣れない道を長時間走っていたから。

2 今まではただ練習が楽しかったが、自分たちの置かれている状況と周りの様子を見て、現実に戻されたから。

3 夢中になって自転車に乗っていたが、辺りが暗くなり帰ることをめんどくさく感じてしまったから。

4 歌を歌い終わっても自転車に乗り続けた結果、自転車への興奮がさめ、急に家に帰りたくなったから。

問三 ――部3「帰りは特訓山の高台を目指せばいいはずだった」とありますが、「目指せばいいはずだった」という表現から感じ取れる「昇平」と「草太」の心情を説明したものとして、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 特訓山の高台を目指していたが、実は進むべき道が別にあつたことに気づき、混乱し始めている。

2 特訓山の高台さえ見つければ家に帰れるので、あせらずゆっくり行こうと大いに安心してしまっている。

3 目印としていた特訓山の高台が見当たらないため、どうしたらいいかわからず心が揺れ動いている。

4 家に帰ろうとして特訓山の高台に向かったが、寄り道をしたという興味を持ち始めている。

問四 ――部4「いざ道を尋ねてみようとしたら、急に気後れを覚えたのだ」とありますが、ここの「昇平」と「草太」の心情を説明したものととして、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 小学生の二人がここまで成し遂げたのだから、このまま二人ですべてをやりきろうと意気込んでいる。

2 男子二人が道に迷ってしまったことを、見ず知らずの人に知られたくないと思っている。

3 ここまで来たからにはあきらめないで自分たち二人だけで物事を解決しようと思地になっている。

4 道を尋ねることは、自分たちが地元住民ではないことを意味し、また、あまりに不自然なのでためらっている。

問五 ――部5「草太を説得するためにはなんとか理屈をつけなければならなかった」とありますが、それはどのような「理屈」ですか、具体的に説明しなさい。

問六 **A** に当てはまる身体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問七 ――部6「草太も急に元気になってきた。」とありますが、それはなぜですか、その理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 道がわからず今まで帰れるかどうか心配していたが、なじみの道が見えたことで家に帰れることが分かったから。

2 帰り道がわからずとまどっていたが、昇平と離れなければ知らない道でも帰れることが分かりうれしかったから。

3 今までの足の疲れを感じもう自転車をこぐのがいやになっていたが、昇平のあまりに強い自信に安心したから。

4 昇平についていかなければわからなかった特訓山への道順がわかり、次の練習の時は道案内ができると思ったから。

問八 ――部7「太陽は既に特訓山の向こうに姿を隠し、西の空は夕焼け色に染まっている」とありますが、この情景が示すものとして最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 男子二人の信頼関係 2 昇平の精神的な成長
3 草太の尽きない情熱 4 二人の冒険の終幕

受験番号	
氏名	

得点

アレセイア湘南中学校